

台北県新店市に住む黄玉緞さん(84歳)は、日本からノートパソコンを取り寄せ、地域のパソコン教室に通っている。1年をかけてなんとか日本語を打てるようになったが、印刷などにはいまだに孫の手を借りるという。

彼女が、八十の手習いを始めたのは、どうしても書き残しておかねばならないことがあったからである。それは60年を経てなお消えぬ「逃避行」の記憶



である。

黄さんは、大正9年台湾南部に生まれた。10人きょうだいの2番目だった。公学校を卒業したあと、看護婦を志して台南の陸軍病院に入り、1年のうちに国家試験にもパスした。生活は一変した。川島繁子という日本名とともに、官舎が与えられ、大日本帝国陸軍看護婦としての日々が始まった。

昭和16年12月8日、ハワイ奇襲攻撃

により太平洋戦争が始まり、やがて黄さんは、婦長の推薦を受けて高雄港から、出征していくことになる。昭和17年11月のことであった。配属されたのはマニラの第十二陸軍病院、1000名以上の看護婦が勤務する、南方最大の病院だった。

平穏な日々が2年続いた。そろそろ帰省命令がと期待していたところ、昭和19年9月、やってきたのは米軍の大艦隊

第十七回——柳本通彦

消えぬ戦場の

記憶をキーに



やなぎもと・みちひこ 京都市生まれ、著書に「台湾先住民・山の女たちの聖歌(現代書館)」、「台湾革命(集英社新書)」など。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。

だった。激しい爆撃にさらされた陸軍病院は北方の避暑地バギオに撤退することになった。その日以来、米軍に追われ追われて、実に一カ年に及ぶジャングル

の逃避行が始まったのである。

付近に落ちた爆弾の破片で隣にいた婦長がふっとんだ。負傷兵を載せた担架を手を歩いた泥濘の道。患者を泣く泣く捨てて吊橋を渡ったこともあった。食糧も薬品も絶え、自分の今日の命

を守るのが精一杯。すでに看護婦ではなかった。彷徨する病院は餓鬼の集団となった。

米軍に囲まれ降伏したのは、昭和20年8月21日だった。終戦の詔勅も知らなかった。

敗走中の唯一の「仕事」は包帯交換だった。ウジだらけの包帯を解いては川で洗っては干し、それを交換してやるだけのことである。捕虜となって米

軍の病院に、配属されて、初めて涙が出た。まっさらな包帯が捨てられていた。物量の差に負けたんだと思った。台湾に引き揚げて、うれしさよりも負けたことが悔しかった。

戦後も定年まで看護婦を続け、気がつけばあれから半世紀がたっていた。数年前に、ようやく当時の軍事郵便貯金が残高の120倍に戻ってきた。しかし、それ以外に、日本政府からは何の

音沙汰もなく、台湾人の自分には、何の補償も証書ひとつ届かなかった。何のために戦ったのか、ただ、ご苦労様でしたの一言が欲しかった。

自分の手の中で死んでいった同僚や兵隊さんたちが、いまも夢枕に立つ。もどかしい思いをおさえこむようにして、パソコンのキーを打ち続けている。最初に打った一文は、小泉首相に宛てて書いた。(台湾人に対する不平等待遇に納得は行きません。82歳と言う老境に入り死に切れぬ」と訴え、暖かき言葉の一言を返答下さい」と返信用の切手まで同封したという。それから2年、いままなお首相からの返事は来ない。日本人に言うことがありますがと問うと、「二度と看護婦を戦場に送らないでください」と答えて黄さんは口をつぐんだ。



日本人に読んでほしいと日本語で打つ黄さん